

2023. 1. 22. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書14章15～24節
『招きの内実』

本日の箇所は「大宴会」のたとえという小標題が掲げられています。この起りは客のひとりが「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」(15)とイエスに向かって言ったことから物語は始まります。おそらくこの客は自分自身も含めて「神の国での食事」をこの世の食事とことかけての他愛のない言葉として発したに過ぎなかったのだと思います。

実はこの問いには初代教会の内省が含まれているのです。言い換えるならば、初代教会の本来の構成員、つまり「神の国での食事」に言い表されるキリスト・イエスの福音にあずかり、且つ招かれる者は一体誰だったのかという問い直しの記事なのです。

このたとえ話に登場する招待客は第1グループ(18-20)と第2グループ(21-23)に大別されます。そのうち第1グループは皆が招きを断ります。それは以下のように分類されます。

- ①土地の購入(18)－財産問題
- ②家畜の購入(19)－財産問題
- ③結婚(20)－家族問題

これら上記の理由で彼らは招きを断ったといえます。どれも正当な理由であり、誰にも後ろ指を指されるようなことではありません。わたしたちもそうなのですが、彼らにとっても事柄の選びの優先順序がそれぞれの人生の中にあるのです。財産や家族の絆を優先することが、なにやら非難の対象のように読み込みがちですが、ルカはそのような無理強いを第一義に語ろうとしているではありません。

ルカは、この記事の本題を21節に置いています。ここでは何度も繰り返され

るルカ神学の中軸ともいべき人々を登場させます。それは「貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」という勧めです。さらに23節では「通りや小道」の人々を連れて来いというのです。これは仕事にあぶれたり、食い詰めた人を意味しました。

このたとえ話は神の国への招きに必要とされるものは何かという問いなのです。それは愛されているという事実の認識なのです。つまり、あなたは必要とされている存在であるということなのです。第1グループに所属する人々は仕事や家族に恵まれて人生をおくっていることが分かります。しかし、第2グループに所属する人々は愛されるどころか、憎まれ、蔑まれ、疎まれる生活の中に歩みを進める者たちでした。仕事や家族という生き甲斐も暖かさからも程遠い人生だったことを思います。

初代教会はこの孤独で不安で、愛されていることを知らない人たちと生きることこそが神の国の招きであると宣言したのです。

愛とは一体何なのでしょう。相手の立場になって配慮することでしょうか。敵対する相手を赦すことでしょうか。相手に惜しみなく奉仕することでしょうか。そのいずれでもあると思いますが、そのように相手を見つめているところでは、愛とは人間関係の修復か樹立の努力でしかないのです。

愛とは、相手ではなく、自分自身を見つめる力なのです。自分をわきまえ直し、相手と共に生きることで人は初めて人であると思うのです。

「招きの内実」とはここにあるのです。愛によって修復・樹立されるのは、自分自身であって相手との関係ではありません。